

# 英語授業でのペアワーク・グループワークについて

千葉 浩彦

## 1. 協働的な学びについて

現行の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。令和3年1月の中央教育審議会答申では、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。令和3年答申教育課程部会における審議のまとめでは「協働的な学び」について以下のとおり記載されている。

探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

英語の授業においては以前から、教室でペアワーク・グループワークを取り入れ、協働的な学びが実践できている。本稿では学習者にとって「協働的な学び」がより充実したものになるように、改めてペアワーク・グループワークについて考えてみたい。

## 2. ペアワーク・グループワークの利点

英語学習においては、教室でのペアワークを行う利点をまとめてみると、それぞれの活動にもよるが、おおよそ次のような利点があると思われる。

### 1 学習内容の確認・定着

学習した語彙や文法を実際に使うことで、互いに学んだことを理解・確認することができ、記憶にも残りやすくなる。

### 2 協力して問題解決

ペアで取り組むことにより、アイデアを共有しな

がら課題を解決したり、新しい表現を学んだりすることができる。

### 3 コミュニケーション能力の向上

学習者同士で実際に英語を使って話すことで、個々の発話の機会が増え、実践的なコミュニケーションスキルを養うことができる。

### 4 フィードバックの交換

ペアで発音や表現に関するフィードバックを提供し合うことで、自分の改善点を具体的に理解することができる。

### 5 心理的プレッシャーの少ない学習環境の提供

クラス全体の前で話すことに比べ、ペアワークではリラックスした環境で話すことができる。そのため、心理的プレッシャーが軽減され、自信の向上にもつながる。また学習者はわからないことがあれば気軽に相手に聞くことができる。

### 6 協調性の育成

相手とのやり取りを通じて、協力する姿勢や相手を尊重する態度を学ぶことができる。これは言語学習だけでなく、社会的スキルの向上にも役に立つ。

また3人以上で行うグループワークに関する利点としては次のようなものが挙げられる(ペアワークとも共通するところがある)。

### 1 多様な視点の共有

グループ内で意見を交換することで、多様な視点やアイデアに触れることができ、自分の考え方や表現方法を広げることができる。

### 2 実践的な英語の使用

グループディスカッションや問題解決活動では、実際に英語を使って他者とコミュニケーションを取る必要があるため、実践的な英語スキルを磨くことができる。

### 3 課題解決能力・論理的思考力の向上

グループで協力して課題を解決する中で、自分の意見を整理し、論理的に伝える練習ができるので、論理的思考力や協調性を育むことができる。

### 4 学習意欲の向上

ほかのメンバーと学ぶことでモチベーションが高まり、学習への主体的な取り組みが促進される。また、互いに励まし合いながら学習を進めることができる。

### 5 役割分担の経験

リーダー、記録係、タイムキーパーなど、異なる役割を経験することで、組織力や責任感も培うことができる。

このほかにもペアワーク・グループワークをすることの利点はあると思われるが、学習者が互いに協力して言語スキルを向上させるための環境を作り、言語スキルを向上させるだけでなく、学習者同士のつながりや自信の育成にも大きく貢献できる環境を提供できることが大切である。

## 3. ペアワーク・グループワークの問題点

実際に教室でペアを組む場合に、座席がとなり同士の学習者をペアにするのは、時間もかからず手取り早いし、学習者の目にも平等に思える。ただ、となり同士が実は仲がよくなかったり、どちらも英語が苦手だったりする場合には注意が必要である。英単語のチェック程度の活動ならよいかもしれないが、協同で英作文を書くなど、時間をかけて行うような **productive** な活動の場合には、両学習者にとって苦痛な活動になる恐れがある。

#### (1) 性差に関わる問題

男女で2名のペアが望ましいように思われるが、教室事情により同性同士がペアにならざるを得ない状況がある。安川(2020)では、習熟度の異なる3つの学習グループ(大学生)に対して、ペアワークの効果、英語の授業に対する学習者の意識変化について比較分析を行っている。Aグループは大学2年生(男12人・女12人)で習熟度が最も高く、Bグループは大学2年生(男32人・女2人)でAグループの次の習熟度であり、Cグループは1年生(男6人・女6人)で習熟度が最も低い。AグループとCグル

ープは男女の人数が均等なので異性同士でペアを組み、教員が毎時間異なるペアを指定した。Bグループは同性同士でペアを組んで学習を行った。このペア学習についてアンケートを行った。表1はその質問と「そう思う」と答えた割合(%)を表している。

表1

質問	グループ		
	A	B	C
1 ペアワークは楽しいと思う	75.0	61.8	91.6
2 ペアワークに積極的に取り組めたと思う	75.0	57.9	91.6
3 授業が充実していたと思う	70.8	55.9	100
4 英語に対する苦手意識が低下したと思う	70.8	35.3	66.6
5 英語学習への意欲が高まったと思う	87.5	53.0	91.7

この結果から、「協同学習は異性ペアであると学習効果が得やすく、男性ペアだと効果が得られにくい傾向がある。また習熟度の高低が学習効果のよしあしに比例するものではない」ということが報告されている。筆者のこれまでの経験でも、男性同士のペアは、全てではないが、ごまかしたり、やらなかったりする傾向がある。男性同士のペアでは真面目にやらなかったのに、異性ペアになったとたん真面目になりだして、しっかりペアワークを行った事例もある。先にも述べたが、できる限り男女の組み合わせがペア活動を活性化すると思われる。この研究では英語の学力がどうなったかの報告はないが、学習者が積極的に参加できる環境を設定することが重要である。

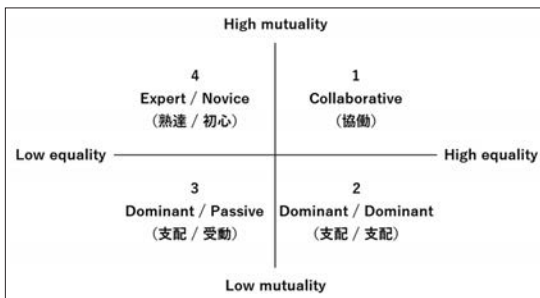
#### (2) 習熟度に関わる問題

英語が苦手な学習者同士をペアにするのは避けたいが、これも教室事情で組ませざるを得ないときがある。Yamamoto(2011)では、大学生の上位クラスと下位クラスでディクトグロスを行っている。この活動はディクテーションに似ているが、1人で行う活動ではなく、自分が聞き取ったものを互いに協

力し、内容を踏まえながら聞いた英語原文を再構築していく活動である。それぞれのクラスで、4～6人のグループでディクトグロスを行う日と1人で原文の再構築に取り組む日を設定して行った。上位クラスでは15人中13人が1人よりもグループで行ったときの方が高い正解率を出している。下位クラスでは10人中5人が1人よりもグループで行ったときの方が高い正解率を出している。上位・下位クラスでのグループの対話 LRE(Language Related Episodes)を分析し、「上位クラスでは冠詞の使い方についてのやり取りなど文を構築するための協力的な対話が見られた。一方、下位クラスでは言語に関する問題についての対話はなく、読まれていたことを思い出そうとしたり、互いにテキストについて覚えていることをたずねたりしているだけで文法的に正しい文を再構築しようとはしていなかった。原因としては対話をリードできる高い言語知識を持った学習者がいない」と報告している。下位者だけのペアワーク・グループワークは学びが薄れるという可能性が出てくる。英語が苦手な学習者同士では、発音の間違いなどちょっとしたことも、指摘できずそのまま見過ごされ、間違いのまま定着するような事態も起きてしまう。復習・確認などのチェック的な活動、定形会話や音読練習などドリル的なものとはなり同士でもよいとしても、思考を伴う productive な活動(協同で行う英作文やディクトグロスなど)では教員側で、英語が苦手な学習者同士がペアにならない編成をした席順を提示して、「これからしばらくは英語の授業はこの席順で行います」などと言って、英語の時間のみの席順で授業を行うといったことも必要かと思う。

#### 4. Storch の A model of Dyadic Interaction

Storch (2002)はペアワークにおける以下のようなパターンを紹介している。



縦軸は相互性(ペアの間でどれだけ協力的で相互的なやり取りが行われているかを示す)、横軸は対等性(ペアの両者がどれだけ均等に発言や貢献をしているかを示す)を表している。1「Collaborative」の領域は相互性、対等性が両者とも高いことを表し、学習者は快く自分の考えを提供したり、相手の考えに関与したりする関係を表し、やり取りで新しい見方が提供され、討論し、両者にとって受け入れられるような解決に達する。2「Dominant / Dominant」は対等性が高いが相互性は低い。両者とも課題には貢献するが、不快さや互いの貢献に対して十分に噛み合えないところがある。3「Dominant / Passive」は相互性、対等性が両者とも低いことを表す。支配的な参加者は権威的な立場を取り、タスクについても占有するような感じになる。もう一方の参加者は受動的で従属的な役割を果たし、やり取りはほとんどない。4「Expert / Novice」は対等性は低いが相互性は高い。1人の参加者はタスクをコントロールするよう見えるが、3とは違って、expert としてもう一方の参加者にタスクに参加するよう積極的に働きかける。

この Storch のペアのパターンに基づいて、福本(2020)は高校生のペア学習について「学力差」「性差」が学習効果にどのように影響するのか検証している。高校2年生39名(男子27名、女子12名)を対象に、新聞記事を読んで600字程度の小論文を作成する課題を実施した。1学期末の国語の成績をもとにして、評定の5、4は高位、評定3は中位、評定の2、1は下位とした。ペアの組み合わせは教員が指示したペアで行った。ペア学習の内容は、初稿をループリックに基づいて評価し、読み手はレベルアップするためにフィードバックし、書き手はそれに対して質問、反論、要望等を行った。この様子は動画撮影した。その後、2稿目を執筆した。2回目のペア学習を実施する前に、撮影した動画で見本的なペア学習の様子を視聴させ、ペア学習の進め方やフィードバックの授受について振り返りをした。最終的には3稿まで執筆した。この結果、初稿後のペア類型は、協働が60.0%、熟達—初心が10.0%、支配—受動が6.7%、支配—支配が16.6%だったが、2稿後は協働が76.7%、熟達—初心が16.6%、支配—受動が0%、支配—支配も0%となった。このほか Storch の分類にはない消極—消極というペア

(ペアよりも1人で学習するのが好む人)が6.7%でどちらにも出現していた。協働、熟達一初心が多い理由は、日本の教育では初等教育段階から学び合うことを重視していること、また支配一支配や支配一受動が消滅した理由は動画視聴で、模範的な活動を見たことによると分析されている。学習効果量についても1回目よりも2回目で効果量が高くなっている。「学力差」については「高一中」ペアと「中一中」ペアを比較する限りは「学力差」が学習効果に影響したとは言えないと結論付けている。また「性差」については、「男一男」ペアと「女一男」ペアは初回の学習効果に影響を及ぼす要因である可能性が高いが、「性差」が学習効果に直接影響するというよりもペア類型に影響を及ぼす要因になると報告している。

総じて、この結果からは、性差や学力差に関わらず、ペアにおける相互性の高さや学習効果との間に相関があることが示唆されるが、日本人による日本語小論文への取り組みなので、英語学習に当てはまらないところもあると思われる。この研究でも述べられているが、日本人の場合、支配一支配・支配一受動の例は少ないようだ。「ペア・グループ学習は学び合いの学習であるけれども、学び愛の学習でもある。一方的にならないように、また沈黙したままということもないように相手を尊重し、自分のためにも、相手のためにもなる活動にしよう」という働きかけをして協働のペアワークになるように仕向けに行くことが必要と考える。

## 5. 2人ペアの問題点を克服する3人グループでの取り組み

2人ペアであると上述のような問題があるので、成績を均等にした男女混合の3人ならどうなのだろうか。「性差」に関わる問題がある程度解決されるし、3人で行うので2人よりも成果がよいことが予想される。4人にすると、1人当たりの責任が薄れ、真面目に取り組まない学習者がでてくる。

高校3年生2クラスを対象に各クラスで2人ペアと3人グループでディクトグロスを実施し、その後、取り組みについてのアンケートを行った。この活動にあたっては、教員側で英語の模擬試験成績をもとに、おおそ成績が均等になるように、全てのペア、グループを編成した。異なる英文を使用して、はじ

めに2人ペアでディクトグロスを行い、別の日に3人グループでディクトグロスを行った。3人グループのときは、1人1人に役割を持たせた(記録係、司会者、書いたものを説明する人)。英文を1回目はただ聞き、2回目と3回目で書き取る。その後、ペア・グループになって話し合いをし、1人が記録係となってペア、グループで話し合ってから書いたものを1枚提出させた。提出したものは筆者が採点した。原文に対してどのくらい再構築することができたのかを正解率として算出した。これをZスコアに換算し、2人ペアのときと3人グループのときで平均に差があるのかどうか検証するために、マンホイットニーのU検定を行った。この結果、どちらのクラスにおいても有意差は生じなかった。このことから、2人ペアでも3人グループでも成績をほぼ均等になるようにしてペア・グループを編成すれば、差が出ないことがわかった。人数が多い場合の方が結果がよくなるだろうという予測に反した結果になった。

この後に行ったアンケートで、2人ペアと3人グループでどちらがよいかという質問に対しては、3人グループがよいと答えた人が圧倒的に多かった。両クラスにおいて3人グループでディクトグロスを行ったときは明らかに2人ペアよりも活気があった。

表2 2人ペアと3人グループでどちらがよいか(人)

	2人がよい	3人がよい	どちらでも
A組	1	32	2
B組	5	29	1

これらを選択した理由については、(自由記述なので全員が書いたわけではない)主なものとして、上位者からは「完成度が上がる」「気まずさがない」「いろいろな意見を聞ける」、また下位者からは「いろいろな意見が聞ける」「3人寄れば文殊の知恵」「2人だと情報が少なく不安だ」「2人だとわからないとき詰まってしまう」「人数が多くなる分、学びも増えるから」「2人より心強い」という回答があった。人数の力で完成度を上げることができると考えている学習者もいれば、人数が増えることで、取り組みにおける不安やはかどらないときの気まずさ

が解消されるという回答もあった。3人であれば、磯田(2021)で紹介されていた Jacobs, Power, and Inn(2002)らによる協同学習の原理の1つ individual accountability(自分が活動に取り組まなければグループ全体の学習が成立しなくなること)に対する責任が軽減されるということも、3人グループがよいと答えた人が多かった理由の1つになるかと思う。こうした回答から、2人ペアで productive な活動をする場合には学習者に不安が生じやすい側面があることを押さえておく必要がある。吉満(2007)においても、大学生を対象にしたペアワークを行った活動で、学生からのアンケート結果で、「相手に気を遣う」「会話が弾まない」など2人ペアでの問題点が報告されている。3人グループにすることで学習者のメンタル面での問題が解決され、積極的に活動に参加できると思われる。

## 6. おわりに

ペアワーク・グループワークを行うにあたっては活動目的を学習者にしっかり伝えることが大切なことである。ペアワーク・グループワークは英語の授業における協働的な学びを実践する活動であり、学習者の学力向上や人間性を成長させるうえでも必要なものである。学習者が「しっかり取り組めた」「有益な活動だった」と実感してもらえる活動になるよう、英語教員として考えていくべきことと思う。

## 参考文献

- 福本義久(2020). 高校生のペア学習における教育効果の検証. 『カリキュラム研究』29号, pp.43-56.
- 磯田貴道(2021). 協同学習の応用による授業の活性化. 『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』6巻, pp.19-33.
- 安川佳子(2020). 英語授業のペアワークにおける同性ペアと異性ペアの教育効果に関する研究—中等教育における英語学習への示唆—. 『教育総合研究草書』13号, pp.147-160.
- 吉満たか子(2007). 外国語授業におけるペアワークの有効性—ドイツ語授業での実践を基に—. 『広島外国語教育研究』10号, pp.169-195.
- 文部科学省(2021). 『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext\\_01317.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01317.html)
- Yamamoto, S. (2011). Dictogloss Activities through Collaborative Dialogue for Lower Level Students. *Rimediary Kyoiku Kenkyu*, 6 (2), pp.141-150.
- Storch, N. (2002). Patterns of Interaction in ESL Pair Work. *Language Learning*, 52(1), pp.119-158.

(岩手県立水沢高等学校 教諭)

数研出版の教科別メールマガジン

SUKEN Newsletter 配信中!

新刊案内・入試分析・コラムなど、バラエティ豊かな情報を月2回程度お届けします。



数研 メールマガ



で検索!

